

## 2017年度自己点検・評価報告書の作成を終えて

教育支援本部担当常務理事

自己点検委員会委員長 廣瀬 克哉

2017年度の『自己点検・評価報告書（教学部門）』の作成が完了した。評価対象は、通学課程 15 学部、1 機構、通信教育課程 3 学部、大学院 15 研究科、3 インスティテュート、15 研究所という大規模なものであり、それぞれの運用単位が行う自己点検を踏まえて、ピアレビューとしての評価を実施することそれ自体が、何よりも作業量として膨大となる。今年度からはさらにそれらを鳥瞰した、全学的な観点による特色ある取り組みの把握の作業も試行され、大規模な総合大学としての全学的な教学マネジメントの一環としての自己点検・評価を実現していくための取り組みが始まった。それらの作業に従事された関係各位に感謝したい。

今年度の自己点検活動の基本方針として策定されたのは以下の3点である。(1) 第3期認証評価への対応、(2) 各部局における具体的な自己点検・評価活動の継続、(3) グローバル化への対応。前年度からの継続方針である(2)、(3)に加えて、今年度は第3期認証評価への対応準備を本格化することを第一番目の方針として掲げた。2019年度に受審を予定している次期の認証評価については、第3期認証評価の点検・評価項目と評価の視点がすでに大学基準協会から公表されている。それを踏まえて本学の自己点検・評価をもう一段進化させていかなければならない。その試行が今年度の自己点検・評価の重要な課題であった。

本学のような大規模総合大学にとって、全学的な教学マネジメントをどのように実現するかは、相当に困難な作業である。各教学単位の自己点検と改善の取り組みは、それぞれのスタイルで内発的に行われている。その取り組みを、全学の自己点検・評価のフォーマットに落とし込んで表現、伝達することはある程度定着してきたところだが、そこに表現されている成果や課題を広く共有することは、まだまだの段階にあるのではないだろうか。

教育研究の取り組みとその点検、改善の取り組みの内発性にこそ本学の強みは存在するが、誰もが本学のごく小さな一部分しか知らないという状況のままに放置するのでは、大規模な総合大学であるということが、単なる量の次元を表現するだけのものにとどまってしまう。異なる学問領域やテーマについて、学内各部門で取り組まれていることを相互に知り得る機会を確保し、波及効果や相乗効果を生むことを促進していく必要がある。それを通して「総合大学ならではの学びの場」としての本学のあり方を現実のものにしていくことが、質としての総合大学を実現していく道である。今年の自己点検評価活動は、まだまだその実現を直接促す段階には達していないが、その目的に向けての第一歩となることを意図している。まずは、総評に取りあげられている項目の中で、中位を引かれる項目について、個別の箇所も参照するなどの活用をいただければ幸いである。